江戸名物部類

清水晴風編集
三竹竹清補筆

特別
又6
9339
6

貴
Z6
9339
6

竹清蔵
山中文庫

りし家の高樓を見の是の其業者のなからを記し者を一冊とし
名家の悪名を知る琴をもかくんと茲に一帖を製し江戸名物
部數とも名付けこれをとゝ面
一冊をつゝ江戸のうゝうゝや四季
明治三年のとし　こさとらの長地下に清水晴風

江戸名物部數目録

竹村老舗餅
市谷の栗焼
金沢の柿子
紅谷煉羊羹
鈴木の菓子
鳥銅の饅頭
新宿の新蕎餅
塩瀬の饅頭
四谷の酒かす
亀屋の柏餅
永楽屋の柏餅

京傳讀書丸
堀田川鯰白
鳴方寄所鏡
新仏の名所
山本の煙草
伊勢屋の醤
大和屋の饅
四方の氣水
豊雪屋白酒
柳屋の揚枝
とんぐりもち

京橋の烟管
品田の筆
筆屋もくさ
小野寺の薬
薬屋記事数
紀國屋烟管
村田弱烟管
うき屋花火
菊一せん餅
大ふつもち
ゆめ〻〻
其屋の乾燥

羽屋せん餅
田其三言餅
右屋かすり
以屋庵十粉
ゆすけ煎餅
長命寺桜餅
麹町田舎焼
書物屋剣菱
かもちん酒
ひすい磯
万久まくの内
安宅やすし

京箱うちき
北川りき焼
大國屋智幸
岡川屋蒲焼
すこ屋蒲焼
大金かま焼
花八岡子
八ち喜料理
乳の形饅頭
よりやうま焼
おちつ牡丹餅
長井うつ飴

花屋嘉兵衛
甲州屋庵
かがや屋ギヤマン
の影堂の扇
木屋丸物
四角屋小間物
京都山城屋餅
笹の雪屋
伊勢儀金ふ寺
下谷すこ屋
永代岡子
大和屋南部

京屋小紋
唐木屋三結
丸利の懐
住吉屋煙管
坂本仙女香
亀屋の時雨
茗荷屋菓子
よし屋のげ
川村の香の物
木村や琴糸
長屋水飴
伊勢屋淀屋豆

いくよもち
羽二重もち
定格餅屋飴
三月堂雲餅
竹村の高中
亀屋千年飴
おかめ岡子
梅の枝ちんぶ
柳屋の香具
さる屋揚枝
菊屋塩煎餅

江戸名物新影

新吉原竹村伊勢屋蒸餅

新吉原竹村伊勢屋元祖ひろうの老舗また其比の美人も弱
蕎麦庵と云茶の数寄者なり人もすめて茶中の川又蒸餅
名茶の口名菓子也 魁し夢初めなる事花街粋家に家なり
福禄寿及唐茶の紋の二葉の葵標も友人英一蝶の筆なるも
同書に見へたり

色白黄中一兵衛英寿煎餅 品光嘉永寅年三又 時候茶屋
携行餅 江戸名物 蕎麦

浅草の門外竹村伊勢
吉原の竹村伊勢は巷中用の元祖また其丸煎も最
有名の物なれども浅草の門外なる竹村また数似の丸煎を製し賣

右せりこれのことを見れもあり偽判判しあれと双方を対照せもちの
つゝらあり偽判明すされまてに古京の竹村ゝ名京をも思ふべし

市ヶ谷佐内坂栗焼

栗焼も市ヶ谷左内坂笹屋八郎兵衛また製し他の菓子を売らび
あるやう跡業なりしも其いゝ武家方の御用多き故川之の注
文多く突然まてに売ひられぬほどの繁昌なりしと天保老人の話なきを
其まゝに記すになん

本石町弐丁目金沢丹後

元禄の頃の比有名なる菓子司なりその引もも寛保三年の古の
にて当時内価の高き事今日より見れもうそらしき程之今明治
三年より廿一年前のものなり

現金安売

一おせんの餅　ある女とけ書き出し日にこうりおし中におせんにあ
売りはじめを引き入れ餅ずいぶんぎんミ仕ゐのりいくらべあらゆ
其外もしらし数ひろし数何まで菓子司ぎんミ仕差上げ下
直て仕始め候中に以上
寛保三年癸亥十月吉日
本石町弐丁目西角　金沢丹後

紅谷志津摩　三煉羊羹

茶の湯の口取菓子に煉羊羹うり出しを製し初めるは寛政の頃
本町四丁目の紅谷志津摩なりと嬉遊笑覧に見へたり

鈴木越後掾

江戸御知越後名　本町一丁目土蔵造当時売るを多く製せ
名代羊羹天下一品
江戸久助店

鈴木越後様ハ本町にて名ある菓子司なり本町一丁目今日
迄ありの有名なる十余両の上菓子作りの家明治の初年迄也
せしが世に連れて衰へかり後家絶へたり

鳥飼和泉様

鳥飼和泉無鳥飼饅頭は人々注文多唯歓ひ薄皮尤好
荷お蒸籠羊羹

文化年間出板江戸名物見立番附欄の当時に鳥飼のまんぢう
を世話人といへる部中軸に記し何れも其比江戸唯一の名物なりし
事をしる

東叡山黒門前金沢丹後様

江戸名物選に其外吉原竹村最中饅頭あるあり菓子屋ハ
薩摩下の金沢のことなりしと云ふ江戸名物選も寛延比のものなり

てりふり町翁煎餅

砂糖上品味尤軽進物年中客同栄縦有結構干菓子
如此煎餅少候哉

翁せんべいはてりふり町角翁屋和泉様といへる家の名物なりし高標
文化比のものなれバ其前より盛大なりしものとおもはる

塩瀬の饅頭

傳馬町頭塩瀬店 饅頭元祖製尤新毎朝蒸立皮如解
筆賈世間下戸人

塩瀬も京橋北一丁目ニ昔より饅頭屋せし舗なりまんぢう屋さ
高名なり高標に京橋北一丁目とも銀座一丁目とも
嘉永四年出板江戸名物見立に霊岸島塩瀬まんぢうともあり
或ハ別の家か

此清左京橋北一丁目とあるも銀座と反対の側なるべし江戸
名物誌に南伝馬町とあるも南伝馬町を指せるなるべし既に八丁堀
にありても右岸にして北八丁堀は左岸に

玉屋伊織御所おこし

おこしも成菓子所蕨前跡側に屋藤原光信に至て賞せし
一流の名物なりこの菓子賞せしは文化より天保の比なるべし昔も今
も違ひ名物となれど一流の物を高いても遠近に買人店先に
なかりしも敢て此おこしのみを限らざる形なり

亀屋の二品柏餅

宝生門外堀端亀屋蔵千秋柏葉染形小色白餡
足当食来第一味噌餡

筋違御門外に亀屋新兵衛といふ菓子舗ありしを今六十

筋違の老人さへ知らざると云菓子に百年以前に繁昌せし家なるも
判然たる標も当近の比の物は僅かなるものゝ中に記す所なるあれ
ど当時の流行せしを疑なし 塩瀬は猶て再記せん
古老曰元の城道に鶴屋と亀屋長孫屋大仏屋の四家ありその内三家
も絶て亀屋のみ城道にありし家なるとされとも城道も筋違御
門外にありしは此説に疑もし 猶塩瀬をまって再記すべし

永楽屋庄右衛門の浅草海苔

竹内久一君の説に永楽屋の主人は名ある書家正木龍眠と海苔屋
なれ者枝も亦龍眠の筆意に似たるやうなりしが其技も永楽屋の
主人なるが為同業者は皆龍眠に揮毫を依頼せしに係るものなり
とて寸暇の龍眠を永楽屋に取りて其謝金正木と云ふ海苔屋前
云ふ 増補江戸鹿子に浅草海苔と云ふも元深川大木林の海辺まで

故に海苔を浅草にて製し来りし其由緒あるゆゑ殊更に其根
元の家を吟味して調ぶべき事なり当時にては海苔を鬻ぐ者多しと雖も
雷神門前に木屋四郎左衛門を根元とし其次富山にて是より住
しそのうち観音の縁起にあさざを結てあらせし十人の内
土師氏末孫といひ伝ふるは浅草海苔を売り出せし書物あれ
ど略して唯永楽屋又木屋四郎左衛門二家なり両家何れか浅草海苔を
売初めし根元なるや永楽屋を根元と云ふもありそれより以前の屋
にあれば猶旧説を従て改むべし
其古へ西海より浅草十鋪を引て二百年前
近き頃まで浅草にて獲れたるは浅草より浅草海苔
つくり出したるに今も正木屋のあり浅草海苔と名付け商ひしは
後には正木屋を立て浅草海苔問屋家名を海苔屋四郎左衛門

とて浅草川端今の材木町に住居せしに後年に及び雷神門前
並木町へ借宅し居たり住居に成る節今の所へ引移りし其
の頃は三田氏にて今の山の宿町名主三田三郎右衛門同家にて
旧記等も曼陀羅堂法善院なり家名は近来正木四郎
左衛門と号せしとあり又同書に永楽屋庄右衛門霞庵
の頃より浅草海苔を鬻ぐとありしとあれば正木の方が古
き家なり又本書に浅草を結て出せし十人の内童
の末孫といひ伝ふとあれども是の浅草寺縁起に十社権現の
前の名ありと正木なるもの無し

浅草揚枝店 柳屋及びよくや 古名某
仁王門より本堂に至る両側及び本堂に至る両側及び堂の

周辺に数多此楊枝店あり柳娜なる美女店頭に居て楊枝を
商ひし明和年の比より意へ行きて今も一戸を形し売家
の比ま店をかまへいふき長櫃ようのものの上に茶筅と楊枝を並へ
て売けるは其比の老十銭へ今に楊枝を商ひて櫃説と云
櫃の上にて物を売る故今に残る之今観音堂の追儺を
行ふ時鬼に扮するもこの櫃説のつとむる古例なりとそ近世
売跡若に載たり

雷門定見世とよんで別に発つ

多くは兵衛とて浅草仲町に住し毎に雷門内の[illegible]院の前へ見世を出し
浅草寺唯一の見世物なりしなり江戸繁昌記にも見えたりその文左の如し
雷門以西一里売紙傭備人体猿画紫鉛筆等之千竹片上、竹意而総
其半文以細片竹、自前端脚其総、交以膠、干後端、以蒲席

上乃説白一家仙中也、次手諭巡回国為猿狙、従下始手、備霞
笠瓢、吹呼竹片割膠之機、於以慮乎、轉扇不渦口不能言
不数夜鳥投其而老残、今則見其物而不見其人蓋不能謀也
其樹梢なんどもなるを初めも江戸繁昌記を見るに毎雷
門側に店を出しけるものなりしが後にも雷門を[illegible]角に店
を構へてると見ゆ「慶應元年[illegible]」に[illegible]
何れ[illegible]総草紙を売[illegible]と見ゆ[illegible]高標
もこの[illegible]なんどやのものの之

菊一蒸餅

麹町三丁目北側鈴木兵庫名高き国この菊一蒸餅を最
名高きものなりとぞ
兵庫麹町三丁目[illegible]蒸餅[illegible]古今唯製菊[illegible]形

焼餅風流菊一紋

火鉢餅

浅草並木西國屋清左衛門の大鉢餅と書よう成る名物
の一なり今も其流を汲む成る餅のこなり
竹屋これも今は絶

みめより

みめより食物を焼と図しあれども四方に焼こと鍋に常のよう
よくしてみめよりと名付書き
享和の比ふりせしも絶るく其名
その比元祖後なり江村田三郎兵衛
しられしを焼通
みめより と題して書き家数軒有りと雖も本元

なる一図の絵えるよりおこるこのうて書きに成る中にあり名言
なるべし却て一図よりかかる所を根元なりと思う人多し
其ならに成る名物の外四方天王橋うら左側の茅屋をあるあ
女がかっとそそし立ち居る長煙と見世の家号者数して
かゝけあるこれ名見光よりの文字なるて始終色のものと覚
居なりは新これも絶くなるなり

茗荷屋の軽焼

成る名物茗荷屋が言丸ひかりやきめうやれ名来つ多名物と言ふ
のぎ茗荷の軽焼き昔に恵と焼き砂糖にて軽焼とて名帯の
ほる茗荷の色とのりもやしめと色えたり

羽衣煎餅

羽衣煎餅も書よりあるを来以所三十日三井筒屋と繁昌せ名物

是もまた明治のはじめ絶家せし家にて人の娘あり名をあいと
よびて美人なりしが明治の初年上野の彰義隊に愛せられ
親之共に此地に住へ其時より茶餐焼も同ちしるらん

同黒三官鉛

相模国小田原ところ天意信記ゆかりむかしに移りても同国北条氏三官
鉛ところとあるとんも同国のの服鉛のいとりせとはいいもやりなら
ものまやうの義すなわちのもの鉛のせりふと集めくらべに二代目柏造
う同国北条三官に於し千年鉛のせりふ有貴々慈い脈類馬
原文同国北条三官市川国十郎あらりせりふなのれら有り
ぶんめと有り

京唐の烟管

（巴）山東の一風の変世流ぶり

山東京伝原

あとの戸系統恩度所二十日

京屋伊兵衛

細磨唐千遍経年不錆不亡鍛錬之銘山東西字王顔男子豆多以為真
東都浜町横南朱焼街一切山東正鉛形貴其貴敷意縫刺微細刷由以奇用故毛茨不起
熟烟包其貴敷意縫刺微細刷由以奇用故毛茨不起
熟烟精極巧他彦世無比者風雅方勝劇男子青忍
招牌為記

京屋伊兵衛も彫成れ山東正鉛形貴非常刻煙精
鉛なり

石京かこ

美濃国善吉原の石京かこも若よう京の文化のこの

文化以前ニ磨墨大の先鋒となりし人ハ風流の道に心さし深く雅
號を文読舎文狂歌をよみし文令舎鬢美といふ葛飾北斎翁初世柳
亭種彦四世川柳文ニ合解子丸等の大家と交り深く其名を文字
と号し親子共風雅の人なり今右京町に住する戸部寄次郎ハ文
読より四代目に当る也其当時川柳点の狂句ニ曰　右京ハ里ハ親父
のおこしたせ

小倉庵の汁粉

小梅の小倉庵もおなしなる汁粉屋なれとも青木陸奥守の果
を継し恩なるをなせしとの評判より一層高名となりたり明治の初迄
繁昌せし汁粉屋なり

弥ほけせんべい

東都一流弥ほけせんへい　蜀山人　俊満画

世わたる道ハ様々ニ而其身の好次第一ツハ二せん極上ハ四せん
新春ニハ慶目出度中納言迄も私か店にて御求被遊候ニ付日増繁昌
仕候而仕合せ至極ニ御座候依而此度私店ニ而名物ニ仕□当
也ハ中をさらに四方の国々に迄其名高き○蜀山
大人ハ狂歌師ほけせんへいと名付則当店ニ而狂歌数々ニ筆
ヲ染せんへいの面ニ歌の趣を尚大堂俊満書画共ニ筆を
不朽其仕宮にも紀文字ハ極一丁目ニ而慰と立るもの太白辻ニ而精
製ニ而あげ并焼以是ニ而も薬来ても不存ものハ世の宝物又ハ遠国
の土産としても喜ばる外ニ狂歌一首ちなみ人ハ都て先ほさ筆
ニ而手造りて千数多枚せ用ゐるの所用向て相備え本屋江
高名を薬屋に　東都人形町通大伝馬二　海老屋てい勝
弥ほけせんへいを賞して大田蜀山人の自筆の狂歌　尚左堂俊満

隅の画なれば（こゝ風流なるこゝろ）葉ゐなり社物なけせんこゝろ
飯塚庵に君うゝ所説あり今も京茅屋に流行す所うの見世
べいの外えもねまくせん白いら所戸より始めし一種の見せ餅を製
しこゝに大き盤器し明治十年内国勧業博覧会出品京都
し遂さきこゝろ数年ゐ居ゐ出品せんこの発世
もう人間猶多しまれども説明つゐ多くこゝ記
きさとゐうきゐうきゐ

竹書ゐねまけせんいも今大枝ゐ京ゐ牡丹ゐもさくの枝も
枝ゐ居ゐと見え漫成のまゐまりて保ゐ見せこの
初ゐ多せゐやもゐらねと見せこゐ拾せゐ非ゐまべし

長谷寺梅餅

長谷寺門前梅餅もゐ戸ゐ名物の一ゐ今も繁ゐなり

竹書ゐ地ゐまゐ梅の葉一枚ゐ柏餅のゐくゐ折りてつむこゐ
まゐこゐ枚ゐ二十ゐ包むゐ多くゐ細勢のゐまゐ柏ゐ京京
の如く一葉ゐまゐ多く二葉ゐ包む今も京京の柏も大ゐ
古葉ゐとり者ゐ場ゐのまゐて用ゐ細勢のゐまゐ今年
の新葉ゐ用ゐ故いまゐけんむ二十ゐ三葉用ゐ場ゐ浦間
一枚ゐくゐまゐてゐゐ柏餅とゐ細勢ゐまゐ書ゐ
に似ゐ

麹所三月曲想焼

江戸ゐて曲想と云ゐ麹屋ゐ麹の焼の麹の三月曲想と出その
家今ゐ所ゐ十四五年前迄ゐ所ゐ近所ゐ世の
風ゐつれてこれもいとよく製して苦の風ゐに非ゐ
曲想焼の書ゐ盤器ゐし文化文政天保の比ゐ繁盛

も文政已来めづる文古の中に張色の名なるものあれも其前より
製大なりしを記するにこれよりて天保頃なり

亀屋の口取菓子

御口取菓子　一包料　弐百銅
甘き兒　一箇料　六百銅
御みそ豆　一折料　壱貫弐百銅
社氏製むら雨　一箱料　弐百銅
志ぐれ
一折　四季詠合せ其外御好次第

右御口取は文政の頃より日々御用にて御作り致居候処
猶此節むら雨と名付候新製一種差出し申候御披露の事申上候右
小　四季折揃ひ申候御用を募りも御作り申上候旨希上

御菓子は数年来当家にて日頃御用に御作り申候処
其の外年々流行致し此頃越し市場に悉く相揃
恐悦直段下直ニ差上ケ候御得意様より御覚候間宜敷奉願上
御猶又不相替御用向御作り申候間御贔屓奉願上候

申八月

流石茶屋　元数寄屋町中程　亀屋久右衛門

亀屋久兵衛も関東人の内よりして文宝亭と云る狂歌師なり
故に二世関東人となり其書風も初世関東人の筆跡を学びて
珍菓に亀屋も其家名を以て業とし又口取菓子を製し
これを高く玉世中志ぐれ口取菓子を新製して世にもて囃さる
今日にしての文政頃より其高標を伺るしの自筆にして
一日太田蜀山人の書を刻刻しなし文宝亭が狂歌を

拾るれとも図示する所の以て図式せるものせるにあり
竹清氏文三亭の羽二重拾るといふものはいかなるものなるや
もの〻二人は七寸のひさとこまを掘形にしてもるらるの枝と
あり拾とまるべきもんとも鏡さみ〻んかたかすこのう
の意遍にすれも線香の如しのものにもるこれの角〻鏡
とこれ型を押して鏡餅の如き形のものとせるの今仙
れの菓子やまもの

いくよ餅

昔しの如く茶屋の婆が昔ものがたりとしてこの餅の歌代と云る題文と根引
しいくよ餅とは鏡し意にこれに鏡せるの説のもるるにつか
ずし草とみて七月朱とこるもの代多の二月の餅は四月の餅
とも共に繁昌せり遂に根元と年代に至り公後に消

古歌刻と仰しかるに説もるるとは是亦四月つかるいくよ
の方見は裏〻みて明治の年迄四月にはみて繁昌せし
も遂に消滅せり

西国一番の地名数者は彩雲来頻世間名物多雲彩
歌代拾歴歌代春　江戸名所詩

鈴木の羽二重餅

羽二重餅は鈴木本屋の名物にして
より伝せし菓子にして明治前迄は繁昌せしが今は絶たり
竹清氏にて仲町とあるは外郎田なるべし但繁昌せしは四月
もちも拾餅の中に詠りのもの〻明るのもるにて羽二重
餅の名のもるものの古或は昔とすつもし
筆は用路田七寸長水

横山町二丁目角に有名なる於竹は徳川幕府へ箒の御用を達せし
旧家なりしが明治初年廃絶へり

淀橋辨慶本加水飴　弁慶屋平兵衛

淀橋大久保閭通に武蔵野と大書せし頭巾にて切落の弁慶飴の
札紙を箒にかけたる男の担ひ歩きて其風姿淀橋より弁慶飴鼓
も擬宝珠の付きし風車等をみやげに求めぬものなかりしとぞ
於竹は今も大塚の弁慶の末裔二ツ橋傍らにありしと云へど
も眺めしも喜ぶべしして此の菜園は巣鴨にて於竹は然る屋の
より移り替へ住して越紙箒をこのまゝ作りて持へり

箒屋もくさ　京都の箒と云ふ　日向屋
かま治兵衛　口ノ丁　三丁目

箒屋もろさて四十余丈なる三味店字右衛門と箒ハ次第に衰へ候なりとぞ
文化の頃の番頭の三州目に鈴なり　江戸名物詩にあり

三月堂粟餅

中橋南伝馬町一丁目三月堂の粟餅は近頃の坂にあるものなり
其頃江戸名物尤店の番付に載りてあれど今もなほ存在の事無
し世の移り行くさま知るべし

小野寺入道　麻布

みぢん砂もすぐて香具屋にて売しなるべし江戸鹿子に麻布竹川丁
入道卯安藤安志堀部橋向の野寺入道芝田町萬康秘方とある是箒
の家にて売られ或三方の珍砂と云ふ中孫兵衛大道に見えたる
を強いて其頃の記へ入るものを見る文明暦二年の世話尽
向雪や山のまさいのみぢん砂　楊枝すつくく似たる谷口良
範は揚場の床に並らせて漢土まで是を向道等とぞ　惟閑
勧募土砂者を洗ふ流へ関白道具擦則光只とあり風来山人

遠慶の新作をかりしくさて同れの始めも下手深なるもあり
引れあんとも是もそこそこ出来るものこ始も第説

十一味乾香散

岸家湯治天保前薬屋秘伝　右店ものこ三十日分
薬屋秘伝も世この薬屋とも別家こ湯治天保前のお店
岸こ三十日分とあるこ湯治天保前と元禄年前にアラこ書
高唯八郎の内の一部こて蓋ちき家こ昔と今の内の所の香
由也書る錦と違い別物なり其時の新なり也と迄て始りと
なるに従い段ゝ出来の由也ものこ書こ家績々出来こなり
とて

竹村伊勢屋甲斐の月

竹村伊勢屋甲斐も名の如く竹村清庵の始て製せ口元薬こ
又無高標も英一蝶の筆なるは元祖遺物なるべし

京傳讀書丸

讀書丸は京橋角忌こ三十日分元祖創製丸薬こ
京元京橋も歳代こ世こ出しなり又のもの

紀ノ戸橋の市紀伊国屋書店

花世粉こ市紀伊国屋書店

毛彫こ忌尽心張　紀伊屋大繁昌　赤羽根の形

鴨川流白

成分薬本所ニ元字三市孫の文化ヒ戸通一の名物とその
繁昌盛なりとて

村田張　さつせる

右自繁昌自負鮮用流仕立　近来新製文人張

吸たばこ 新嶌 青柳

村田ハ呉服町にも代々煙管屋にて今に存するなりこれは
も明治三十年の新刻あれども隣に張付て古きを模して張替すれ

かうやも花火線香 横山町二丁目

江戸まで花火といひもかぎやとたまやの両家を以て名家もありしかも自火を出
せし為絶家しえるも鍵やも今に至る繁昌なり此の家の

花露屋 讃磨

芝神明前花露屋大坂屋将軍若年寄衆の家香具を兼て
二条油の類を初めて売弘めしも花の露の新刊に出せしとぞ
竹清ニ西鶴代男巻二十香具売の条に同芝神明前花の露
の西村吉兵衛十九年也と申しとあり
鳴方會所の鐘

本所二丁目の烏金會にも八丈縞の多き也是を売捌く所の田幕の此
この頃の手本也を嫌求せんと思ふもなく烏金所にて買て求むるを
常とす

若君手吹新前なく一所々の千物を買ふ事ありとぞあり
又此所まで売れ根付の木魚を買ひ求しられハ音響よく
桑を彫り八丈を刻しあり價天保の頃なりし八丈ハ流刑の徒
ありて之れらの作りしものも売れることなりと思ふ

歌仙の石碑

伊藤吾浴広瀬お呉服屋江戸売弘店本所二丁目北側中程
松屋広瀬の歌仙又碑ハ江戸唯一の又物店之世商標も安政
前の頃の印刷物あれバ歌字を以てつくるを求むる殊に
面白く珍奇の物なり

竹清水或は名酒と云ふ道の酒の名なりとぞ
有名なる酒の名酒なりる酒のゆゑ用ふる所に花石湖と七絶
臨路鎮に北人参勧品も沿酒の名酒に沿ふ三十
里沿酒若佳といへんもうんとうまいのうまい
中路の唐菊
大佛の三月中路の仏参詣の若い者の高地支那寺の
駒寺と高い家と今も駒寺及び洋ホテル居ロアに唯一
ホテルとうとうねと若し唐ホ
家のるのこ沿ヨりんごやと有名なる高家なること
かがや屋ギヤマン
面白かかるる久兵衛もかとわ形しく駒寺のギヤマン
今のがうえと高い家なりうんも驚今と違いギヤマンと無む者
しい沿名と高い家与都唯一なり
山本の花撰
山城大橋の本和兵衛は四条橋通り三丁目に老舗の茶師で
今に繁昌若にうりうる
御影堂扇
ロアホ四丁目の御影堂は扇の名業の舗と最も有名
なり文化の比ロアホ久ホの一ヨ数百年ある家也
竹清与福田芳の君与活ヨこの者板と兄悦与筆なる
ヨ芳野見と扇やるれも砂糖板のるるべし
木瓜屋の豆也
芝神明前木瓜屋十兵衛は有名なる豆也高さ式れ拾ようと
とも既ヨ寛政の年號のれば甘ようの老舗なるべし

伊勢屋の醴

文政の比迄高砂町に醴屋三郎兵衛三河屋惣次郎大坂屋宗右衛門伊勢屋伊兵衛とて三家之醴ハ繁昌せしが又此品なりしとぞ

池の端仲町日野屋の蜜団

下谷池の端仲町日野屋忠蔵も袋物商也葉茶并に菓子旧家なりしが明治初年家絶えり今の宝丹の鋪の西側なる宮七八間ばかりなせし家に毎鋪先まで四季折々の小間物まで飾り並べ年中絶えず掲げたる事他に類なし是の店乃顔なるべきとて鋪先まで其もの市のことし　江戸名物詩にあり

大和屋の二形さ

同下仲店の大和屋利右衛門も文化文政の比盛名高き江戸の名物なりしとぞされど其比の見立番附の三段目に載りしを以ても知るべきなり

七沢屋小細工

是持筆筒莨子数一寸屏風一丈楼看孝児女皆欲目恰似小人島裡遊　名物詩

七沢屋仙助も池の端仲町にて名高き手遊屋なり雛并数も余りに揃ひも七沢山也と称して販売す其ちいさき事のたぐひなる細工物の精巧なる他店にて及ばぬ雛雛道具数多有名なるものなりしが一寸程にて精巧なる雛形をそへしこともありし

四方の瀧水

四方の瀧水とは名高き酒名にて新中新に町の四方

人の知る所なり

豊島屋白酒 久兵衛創業

[illegible]の中の豊島屋も白酒を売り出す[illegible]の書店にて其繁昌驚いに堪へず殊に三月朔日より白酒の賣出しまで舗先を足代と組こして客を迎ふに未明より人のふせ籠にはアヤクの用意あり豊島屋氣強色薄一家凡人の為賣多難賣

賣始賣終半日中

唐木屋三味線糸

唐木屋七兵衛元祖天正[illegible]年間の末孫之助[illegible]と共に[illegible]後九郎助と共に[illegible]

家を住し唐木及小間物等を商ひ高い業績[illegible]を明治[illegible]絶

ひたり[illegible]病院を待て再元せん

丸利の袋物

本所三ツ目通り[illegible]年と云ふ丸屋利兵衛の袋物は[illegible]

の祝[illegible]苦しせいこくなる始めも丸利[illegible]明治[illegible]

ねばならぬ[illegible]政が文久以前[illegible]繁昌を極め

しなるも明治の初年家運[illegible]道を絶へ[illegible]今丸忠丸[illegible]

[illegible]袋物高も丸利より[illegible]

亀屋のお菓子

土佐藩の[illegible]理[illegible]正徳年間[illegible]

千年うり

土佐少掾橘正勝直信筆揚内匠頭大夫

千歳んうり上るつ

千歳んうり　三千年是いめてきたらんとうばこさくさくこ

まるはいつぶたくきくるつ　そと　たつみが里れかきなに　東おうさくく

南ちぶぶ　見ぶ　このあちまこぶ　徳とりや　いさやめもく

ためこやうとう

千年飴　元禄宝永の比江戸浅草に飴賣あり

その飴の名を千年飴又壽庵糖ともいふ今俗に長命と

云飴を千歳飴と書を彼七兵衛より起れり

東京大伽藍所三十間　泉石製

寛和家蔵の書の祖先も泉井戸五勝四世の人なり宝暦の

比江戸浅草に好て業とし其比高かこと

云菓子を二四しして是を述懐せしめ大きに流行し遂に伽藍所の

名所となる菓子鋪也前に記せし千年飴と憩し賣ち

せしこと也の名ぬの名ぬの名ぬ縁因あり千年飴と憩し賣ち

といひて始めの辟のりきれも書ちのつから高尚に流れ都

て人氣を奪ひ不相応と是非なく次第に　第七十連の内の金

色地　種古京丸屋しるあらん千年飴　壽庵糖の歌を憩し

なり明治二十年比絶家せり

花八岡子

加藤花八岡子と丸屋花八と云世歌の記者りそ西記

の見る先生て見ることの出せる拿のも弱られぬものも

なけれども記年りも金づくそ買へなるのこ拿と當めて物の年と

[illegible]

成茸餅

金龍山成茸餅　ここやうに成茸のもの　今は無

昔は今の金龍山成茸餅

[illegible]

みつとうの西瓜の図　錦絵図也　高ひさぐすり屋角

今住居の所も元禄之頃　竹藪ゆへ　柿ひ[illegible]

其比より餅屋也　[illegible]

公英の畑より立り言る　[illegible]

成茸餅と名り　中由の[illegible]

家なり　これも文化年間の書留なり

馬喰町[illegible]

馬喰町の茸餅　[illegible]

昔の名ゆへ

えびすやの甘酒

甘酒の豆煎ものと入て売る　[illegible]

も天保老人の説なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

燒物の數

幕のあとにはさまれて燒く燒物は燒物屋の前ばこ
ゝの數にて所〻にあるものこれ

永代橋　佐久屋橋　萬重長

永代橋際に永代こゝに又八橋こゝにあり永代橋の
際にあり　このあたりにて其所にあり　とゝ萬蒲の
屋の近くにあるものゝ又八はつまりの又をはるものゝ　今中橋
（海）橋　萬蒲　橋　とゝ
正徳八ツ橋　同　大橋　ゝ　永代橋の際に武軒あり
てゝ　もも　盤　書　せ　又　ゝ　とゝ

長谷屋の形飯

寛永年間のはじめ　御用　中橋あり其後　中橋の又へのゝて

橋　長谷屋清三郎　二
しあとにて中橋とも　無家の橋と　木製の橋と　番橋
至りしも又養の家　家明　廿五年以前の明和　男女下に
特らすに居て　前　ゝ　ゝ　ゝ

菊屋の遊せん

娘の名をせんといとも　永の比　一本の又
子供　朝顔　もち雪　紫蘇　又林　の名色　中四
娘　三丁目　菊屋長　とゝ

松寿し

元禄以前　松　の形　前　松屋　松五郎　松寿
現今明治十四年　本家　中村　柳橋　西宅　松の寿司
本石町西宅　新高　又寿　天保二年　横家進物　三重折

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の鍋と高麗のようにて今年四月と鍋屋の名称あるものなり

蒲焼名物川屋魚仙年中休日多長壹歩鍋鑑一四

然来風味異尋常 名物

すこしの蒲焼

屋形所に書られし書も古き家こ鍋鍋樽焼の文字面白に非

さるも面白し

大金の蒲焼

室町殿世の時大坂屋金義も四条の兎鍋今の大金も

弥四郎神下に住し恭敬とる人先代の添を可受況今も繁昌

信者のきせる

苦しゆの鍋さんちうやとつるきせるや為之食魚屋とあり

高麗と言名なる家なりまつさて信者屋形のきせる

とつて百年ばかり今ますこらぬ名物なり

八百善の料理

二階の八百善も若き時明治の今日まで創意家の大家なるあり人の

もてあそびなり

今川橋うづ鮒

◎長井の右衛門うづ鮒あ次の比是は繁昌なり家こ紀中

又の恵のりて甘露比枝行の恵原別記おて高名なり今は如と

ふる高服店の本家発南のうて床屋はの家こ

笹の雪豆腐

お膳きめこ笹の雪 根岸鶯田三軒茶屋 玉忠

根岸の笹の雪とこも沼もらめも形さ名ぬなり今は繁昌者

にもなることなり 此処然に昔前のものなるは 夢今のあとも

[illegible]

仙女香

京橋柳町に製する仙女香の書きたるものを見るに[illegible]

竹清[illegible]

大[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大和屋の白玉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吉原ぬけ

豆腐のいさきの田楽

[illegible]

京都 柳うえてん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

し鋼のごとく鋼の乾しなるとき細末して味をつけしこと故の
故の故ごとくのみ流行い称するべし

柳屋紅白粉

第拾四二月角柳屋西京三条にて昔より今に至る迄名高き
名香屋形名元の比名物の名物の香料三品
目立に載せるべし

ようやうす物

ようやうす物は西京四つの書屋にて南京三百年記念祭の物産
よりも其業ゆえ物産迄三百年経過せし土産も東京中
三三に過きしより其の出産の二三の物産も市区物産の名
称い今も有さんもよりやく三百年前の四家なる事疑いる
けれども伝聞の由を始めいろいろの比較まとまる所の

想像まい元の高下如に引験て商店せし鋪なるべし

下村杉松の抜由

三都名勝山城製書幾拾重二十帖紀行道中経歴日
不詳不然一番由 名物詩
名西賀所下村山城縁近以うて元禄年間の白粉の看板を店先に
ありたる四家なり

唐面定為強強豆

唐面定為強強豆は名高き鋪なり
唐面定為強強豆の強強豆は名高き鋪なり
共七の強強豆を砂糖を砂糖
形を砂糖を加へ青さを形を改なるものなり唐面定為強強豆
東海道名所記に元禄年中より
買高物産すものの由こと
以て今あんば今に産面のあけ

もの笑ふて柳屋方へ知せるものまいあるべしと思ふ

乳の形白雪こう

神田平河町二丁目米屋七兵衛方にて夢白雪糕 乳少なく

以前に欲せる者まれ今日のミルクの如く尊重せ者なりしも

明治の初年より家絶へり

伊勢屋儀もち揚

本所四ツ目伊勢屋小吉味噌の起元也

つちや美女より

大伽羅所横町柳屋方にて永年間江戸一品名物高家

木村屋琴糸

住吉町木村屋の琴糸江戸一品の名物

さるやの揚板

ちり所さるやせ七郎兵衛やらし

川村の責物

南伽羅所三ツ目川村英吉郎の責物も江戸一のみやげ品

今又繁昌者一に異なるべしと

前永六年白牧の江戸名物細工人形所大江戸所々一品高

名三部とあり其重なるものも

大鯛所氷室　豊島所白雪糕　人形所金花糖　芝神所江戸じま

伽羅流福徳豆　品川所餅　三田よりの氷　柳所五色煎餅

大伽羅所みめより　横山所まむし酒

並木通四川鉄砲　人形所三色特餅　本所歌仙鉄砲

本所四ツ目金山寺　本所隠元饅頭　南傳三川村の香物　はし所日光唐がらし

万所出細工　諏訪所揚のこ責　神明前精進物　和泉所さらし鉛

ちり所花ものさし　深川仲所ふくべうかう　はし所隠元指つむこ

まるかしの御　まるの御紋付　長刀琴　二枚所丸イの三ツ世糸
住吉の木付　琴糸　横山三郎四　黒漆所　ゆ　新右衛門所仕多帯
大言者前石臼　てりふの所　横板　やも所　ゆたら所　四ツ市　めびす
りじ所　うるま　米山所四ツ目　人形所　むかう　米山所　小山の寸湯

等の品を到記し其ヒ有名なる琴右の通半も家絶ニて
と今ま繁昌者ニ語らざるもいと多し猫弾る弦い強こむこと
亡父清水橋風有如古ニ三味線　菊蒔絵　ロ戸名物高燈籠一帖
旦注其来由題曰江戸名物部数其友図四紫男強要
弱之以為懸中ニ秘蔵男編高調集多取ニ中ニ紫男
双後義書多帰林若樹ニ書示其一也大正六年丁巳
二月借覧数日ニ鈔其所注而留之賀中云

竹清翁

清水

大正七年戊午五月ニナ五ッ三村竹清氏より借覧ニ与之四二
三冊ニ文ヒ書きかへ家書と為す　四中　共古

共古